

胡適と白話文・国語運動

大原信一

一 建設的文学革命論(その一)

大正九年(1920)に発刊された雑誌『支那学』の創刊第一号から第三号にわたって連載された、青木正児「胡適を中心と渦いてゐる文学革命」^①は、文学革命にたいする日本の学界の、おそらく最もはやい反響であろう。平板な紹介におわらず、その論のよつて来るところや、その運動の経過と帰趨などが、批判をまじえながら的確に述べられている。運動の成果を評した中で、「小説に於ける魯迅は未来のある作家だ。その「狂人日記」の如きは一つの迫害狂の恐怖的幻覚を描いて今迄支那小説家の未だ到らなかつた境地に足を踏み入れてゐる」といって

いるのは、予言的響きを感じさせる。

民国六年(1917)一月の『新青年』第二卷第五号に掲載された、胡適の「文学改良芻議」^②は、アメリカ留学生活でつちかわれた知性とみずみずしい感性による中国文学再評価によつて、文学革命の口火をきった。それは一言でいえば白話文学の鼓吹であるが、いまだ白話文そのものには、詳しく説き及んでいない。

彼はひきつづき同年六月、同誌第三卷第三号に「歴史的文学観念論」^③をかかげ、さきの文章を補った。歴史的文学進化の観念はアメリカ留学中からの彼の持論である

から、この文章はいわば「改良芻議」の序論にあたる性質のものである。その主旨は、一時代には一時代の文学があり、此の時代と彼の時代のあいだには前をうけ後ろをひらく関係があるが、全面的な踏襲はゆるされない、もしそうならその時代の真の文学とはいえない。(中略)思うに、今日の文学は白話をもって正宗とすべきだが、これはかりの前提である。文学史上すでに多くの証拠はあるが、今後の文学にしてこれよりぬきん出るものが有りや否やは今後の文学家の実地証明にまたねばならない。(中略)吾人が古文家を攻めるのは、彼らが文学変遷の趨勢にくらく、千年も二千年も昔の文体を作ること汲々としてゐるからであり、世の文人もまた白話文学を小道邪徑として、全力をあげてこれに当たろうとせず、かくては全副の精神をもって白話文学を実地にたす日は永久に来ない、全副の精神をもって文学をつくらずして文学の発生を望むのは、耕さずして収穫を求めるとひとしく、ついにそれを得ることはできないと言うにある。

以上の二論文中の問題点と観点を、一步すすめて積極的な角度から提起したのが民国七年(1918)四月の同誌第四卷第四号にのった「建設的文学革命論」⁽⁴⁾である。彼は、これまで文学革命の提唱は破壊の面から着手しなければならなかったが、新中国の活文学を創造するため、以下ここに私の考えを述べると、まずその動機を語ったのち、彼は「建設的文学革命論」の唯一の主旨は「国語的文学、文学的国語」の十字につきるといふ。この標語の意味は、彼自身のことばを借りると、「(生きた)国語で文学作品を作れば、諸士は真に文学的価値ある国語を持つことになる」といふことになる。

いまその主旨にしたがえば、私たちの提唱する文学革命は中国に「文学的国語」を創造しようとするところである。「国語的文学」をもってはじめて「文学的国語」をもつことができる。「文学的国語」をもってはじめて、わが国語はまことの国語となる。国語に文学がともなわなければ、生命もなく価値もない、したがって成立もし

なければ、発達もしない。これが私のこの論文の主旨である、という。

つまり、彼の考えは、国語で書かれた活文字が成立しはじめて、国語の統一も発達もはかりうるというのであって、したがって標準国語を云々するまえに、まず白話文学の発達を講ずべきで、そうなれば標準国語はおのずから定まってくるという結論になっている。

上記の十文字の標語は、白話文運動と国語運動の結合を自覚的にとらえた指導的な綱領として、折しも小中学校の「国文」科を「国語」科に改めることを求める世論とも結びついて、文学の領域をこえ大きな社会的影響力を発揮するにいたる。彼は国語運動との出会いについて、以下のように回顧している。⁶

私は帰国後すべて枝葉の主張はさし置いて、この中心的な文学工具の革命論を私の作戦の「四十サンチ砲」にしようと決心した。そのころ、蔡元培先生の

紹介で北京の国語研究会の一部の学者たちやわが北京大学の数名の文学革命論者と会談した。彼らはみな「国語統一」の悲願を抱いており、まず一種の「標準国語」を作りあげたいと主張した。私は彼らにたいしこうのべた。標準国語は国音字母や国音字典によって決められるものではない。およそ標準国語というものは「文学的国語」すなわち文学的価値のある国語でなければならぬ。国語の標準は偉大な文学者によってきまるものであって、決して教育部のお触れできまるものではない。国語が文学的価値をもてば、おのずから文人士に愛用され、しかるのち教育の工具ともなり、また全国の言語を統一する工具ともなることができる。そして私は、標準の有無にかかわらず、まず白話文学から着手し、まず白話を用いて価値あり生命のある文学の創造に努力すべきだと、主張した。

彼は水滸伝・西遊記・紅樓夢・儒林外史などの白話文

学が「標準白話」として機能しているがごとく、新しい国語で書かれた白話文学から「標準国語」が生まれると主張する。この主張の誤りでないことを証明するため、ヨーロッパにおける近世の国語問題が文豪の出現によって解決していることを例証にあげている。イタリアにおけるダンテ、イギリスにおけるチョーサー、さらには外来ラテン語にかえてドイツ語訳『新約聖書』をあらわしたルターなどの例をあげ、みなその地の口語をもって大文学を創作し、国語統一に貢献するところが大きかったと述べた。これら諸外国における過去の例から判断しても、彼の立論は穩健妥当なものであったといえる。

この点をとらえて、また文学革命の考えがアメリカ留学中に芽生えたこともあって、彼の白話文学の提唱は、ヨーロッパ近代文学史から発想されたもの、あるいはその引き写しにすぎないとする議論が一時期さかんに行われたことがあったが、かような一面的な外因説はいまだ

は姿をひそめたようである。

彼は自伝⁽⁷⁾の中で、年少のころから親しんだ書物中の「夥しい一群は、みな口語の小説だったので、私は知らず識らずの中に、少なからぬ口語の散文の訓練を得、十何年か後、たいへん私の役に立った。」と述べ、また上海の中国公学⁽⁸⁾に在学中(1906~1908)、「競業旬報」という校内白話誌の編集・執筆にたずさわった経験を述懐して、「一年有余も、口語文を作る訓練を与えてくれた。(中略)この一年有余の訓練が、私に絶大の利益を与えてくれた。口語文はそれ以来、私の一つの道具となった。」そして、七・八年の後には、この道具が私をば、わが国の文学革命における草分けとならせたのであると述べている。

この中学校では、当時すでに教員もすべて標準語を使い、四川・湖南・河南・広東などからきている生徒たちもみな標準語をはなし、彼も入学後しばらくいるうちに標準語がしゃべれるようになったと言うから、彼は標準

語の小世界で人間形成期の数年を過ごしたわけである。

これらの体験をつうじて鬱積していた白話への思いが、アメリカ留学中に、いろいろ外国の事例を知るにおよんで一層ふかまり、学友との意見の交換のなかでしだいに理論化され、帰国を前にして敢然その考えを世に問うたのであろう。彼が文学革命の火の手をあげるまでには、かなりの熟考と研鑽とが費やされており、詩集『嘗試集』⁸の序文や、日記・雑記を集めた『葺暉室劄記』⁹などにかなり細かくその経過が述べられている。とくに「文学革命の始まり」というサブタイトルつきの「逼上梁山」¹⁰は、胡適自身が「この文学革命運動がどのようにへ偶然」国外で始められたかという歴史を忠実に記載しておいた」と言うだけに、文学革命という考えが育って行く経過を知るには一番よい資料であろう。近ごろ書かれたものでは、樽本輝雄氏の著書中に胡適をめぐる以上の経過が簡潔に紹介されている。

彼はアメリカで、一九一〇年から一九一七年まで七年

間の留学生活を送った。その間、コーネル大学の農学部、文学部で、はじめは農学をおさめ、のちには政治・経済・文学・哲学などをおさめ、文学を専攻したわけではなかったが、好きで文学書はかなり耽読した。そのころの作詩には、西洋詩人の影響をうけていたことが、『嘗試集』付録の「去国集」からうかがわれる。青木正児(1920)によると、「按ずるに併しそれはまだ康有為や梁啓超の西詩に影響されたある種の作と同一程度のものであった。」

最近の朱文華『胡適評伝』¹²という本では、一九一一年前後におこったアメリカ文芸復興運動(An American Renaissance)の影響を指摘しているが、胡適自身はすでに『嘗試集』で「私が主張する文学革命は、中国の今日の文学の現状について立論したにすぎない。欧米の文学の新潮流とはまったく無関係である。時には西洋文学史を参考にしたが、三四百年前に欧州諸国で(国語的文学)が生まれた歴史をあげたにとどまる。中国が今日

〈国語的文学〉を必要とすること当時の欧州のありさまとよく似ているからである」と述べている。

胡適は『中国新文学大系』建設理論集の導言の中で、陳独秀が「中国は近来産業が発達し、人工が集中した。白話文はまったくこの必要に応じて発生し、存在する」といった言葉をとりあげ、陳独秀のこの議論は経済史観の立場にたつものである。私の「逼上梁山」はそれをくつがえすような答えではないが、少なくとも、歴史的事実の解釈はそんなに簡単なものではなく、一つの「最後之因」で解ききれものではないことを説明できるだろう、と一矢を放っている。

続いて、彼は過去数十年の政治的原因のほかに、白話文運動を押し進めた複雑な「因子」のうち、重要なものとして次の三点をあげる。

① 一千年余りにわたる白話文学の作品が存在すること。もしこれがなかったら、白話文学の提唱は数年で全国を風靡するにいたらなかっただろう。

② 過去二千年、全国の大部分にわたり、大同小異の「官話」がひろまっていたこと。もしこの基盤がなかったら、「国語」問題は手のつけようがなかっただろう。

③ 鎖国が解かれて世界の文化と接触し、比較・参考すべき材料に恵まれたこと。とくに、西欧近代国家の国語文学発生の歴史は中国の文学革命への自信を与えてくれた。

彼にとって、文学革命とはすなわち白話文運動であり、同時にまた国語運動はその一翼であると考えていたことを、この整理からうかがい知ることができる。

二 建設的文学革命論(その二)

胡適のこの文章の中で、もう一つ注目にあたいるのは、彼が白話文学と白話文の正統性を、きわめて明確な自覚をもって、たからかに主張していることである。

彼はいう。この一千年来、中国は価値ある白話文学を生んできたが、だれ一人として白話を中国の「文学的国

語」にすることを主張したものはいない。「有意的主張」がなかったため、白話文学はあの「死文学」から「文学の正宗」の地位を奪い取れなかったし、そのため白話は標準国語になれなかったのである。私たちがいま国語的文学を提唱するのは、国語を「文学的国語」にするための有意的主張である。文学的国語が生まれてはじめて標準国語が生まれる、と。

彼の「有意的主張」は、文学の上はもちろん、書面語の変遷の上からいって、画期的な意味をもっている。清末にいたり、中国人は国語・国字問題について明確な意識をもつようになり、「一つの言語」とその表記の仕方について主張する人が相次いであらわれた。この問題については、あらためて別の機会に取りあげたい。

胡適の上記の主張は同時に、これまで中国社会に普遍的であった二元的な考えをのりこえ、一元論の立場を確立したことを意味する。

この問題を軽妙に説いたのは周作人である¹³。それによ

ると、清末に白話報がさかんだところ、当時の白話作者がまず古文で考えだした後に、これを白話に翻訳して書き直したものであると言う。「いま私たちが文章を書く態度は一元的である、すなわち、どんな人に対して、何についても、また著述にせよ、ちょっとした書き付けにせよ、一律に白話を用いる。だが以前の態度は二元的だった。すべての文章に白話を用いたわけではなく、ただ、学識のない一般の平民や労働者などにだけ、白話を使ったのである。当時の目的は政治改革にあった。すべてを古文で書いたのでは、一般の人は新聞さえ読めない。それでやむなく白話を使ったのである。つまり古文は旦那さま（老爺）のためのもの、白話は召し使い（聴差）のためのものだった」と、当時の人々の二元的な態度を批判している。

胡適は、「われわれ」のことば、「かれら」のことばという言い方で、『五十年來之中国文学』¹⁴の中で、この問題を論じている。

一九〇四年に、科挙は廃止されたが、白話文学をはっきり主張する人はなかった。二十年來、白話報や白話の書籍、官話字母や簡字字母を提唱する人はあった。だが、これらの人々は「有意的主張」といえないのではないか。「有意的に白話を主張した」といえるが、「有意的に白話文学を主張した」とはいえない。彼らの最大の欠点は、社会を「われわれ」と「かれら」に二分したことである。一方は、白話を使う「かれら」、もう一方は古文古詩を作る「われわれ」。われわれは今までどうり肉を食べるとしよう、だがかれら下等社会は肉を食べる資格はない、しかたがないから骨を放って食べさせよう。かかる態度はよろしくない。

彼は、つづけて「一九一六年以来の文学革命運動は有意的に白話文学を主張した。この運動は二つの点で、白話報や字母運動と絶対にあい異なる」という。

第一、この運動には「かれら」と「われわれ」の區別はない。白話はけて単なる「開通民智」の道具ではなく、中国文学を創造する唯一の工具である。第二に、この運動は古文の權威を攻撃し、それを「死文学」とみなす。白話報運動や字母運動の人々は古文のわかりにくさを認め、庶民の無知識をあわれんで、格下げして通俗的な文章をかれらに与えようとするが、自分たちはやはり漢魏唐宋の文章をまねている。文学革命はそれと異なり、「古文は死せり」と天下にその訃報を伝えた。

彼が中国文学における白話文学の正統性、書面語としての白話の正統性を「有意的」に主張した事實は、彼がその後どんな道を歩んだにせよ記憶されてしかるべきであろう。

では、胡適はなぜこの事に成功したのであるうか。この点について、もう少し周作人からの引用をつづける。

周作人は、その頃の白話は政治的必要からでたもので、戊戌政変の余波にすぎず、後の白話文とはあまり関係はないと言ひ、ただ古文のくだらなさを見せつけてくれた点で、好感をもっている。もし同じ事を古文であらわしたら、その形式のおかげで、しばらくは欠陥を看破されずにすむが、白話に書きかえればまったく内容のないことが明らかになる。甲午の役（日清戦争）のち、中国の政治に大変動が生じただけでなく、文学の面でも揺れつづけてきた。まさに古き時代は終わり、新しい時代を迎えようとしていたのである。それがただちに生まれなかったのは、三国志にいう「萬事齊備、只欠東風」（万事ひとしく備わるも、ただ東風を欠く）にあたるが、いわゆる「東風」は、ここでは「西風」（西洋の科学や哲学・文学など）と改めるべきであろう、としている。

三 胡適と国語・普通話

黎錦熙は民国初期の国語運動の状況、すなわち「国語

研究会」の活動をしるした中で、⁽¹⁵⁾『新青年』が完全に白話文ばかりで編集されるようになり、注音字母が教育部から公布された民国七年（1918）という年に、胡適の「建設的文学革命論」が発表されたことをあげ、「この文章の発表後、文学革命と国語統一の二つの潮流が一つになつた、現代史家はこの年をもって中国のルネッサンスの始まりとするだろう」と述べている。その喜びのほどが推察できる。言文一致の白話文学、これが二つの運動をむすぶ媒体であり、「国語的文学、文学的国語」が彼らの旗印となつた。

同じ年の十二月に出版された『新青年』の第七卷第一号に、胡適は「新思潮的意義」⁽¹⁶⁾と題する文章を書いた。これは数年におよぶ彼自身の経験の総括ともうけとれる。この中で彼は次のように述べている。

私見によれば、新思潮とは新しい態度のことにすぎない。この種の新しい態度は批判的態度ということ

ができる。この批判的態度には二つの方向がある。

一つは社会・政治・宗教・文学の諸問題を討論する「問題の研究」であり、もう一つは西洋の新思想・新学術・新信仰を紹介する「学理の輸入」である。

前者のうちこの二三年來の雑誌にあらわれた問題をあげれば、①儒教問題、②文学改革問題、③国語統一問題、④女子解放問題、⑤貞操問題、⑥礼教問題、⑦教育改良問題、⑧婚姻問題、⑨父子問題、⑩演劇改良問題……など。また後者にぞくするものとしては、『新青年』のイブセン特集号、マルクス特集号、『民鐸』の現代思潮特集号、『新教育』のデューイ特集号……などをあげることができる。

胡適は時代の知的枠組みのなかで、国語問題をこのように位置づけているが、陳独秀もまた、ほぼ同じころ、一九二〇年のはじめ、武漢の文華大学における講演で、

五四の時代精神について全面的な概括をおこない、「白

話文」を次のように位置づけている¹⁷⁾。

時代精神の価値（デモクラシー）

- (a) 政治的デモクラシー（民治主義）
- (b) 経済的デモクラシー（社会主義）
- (c) 社会的デモクラシー（平等主義） 一切の不平
等な階級的特権に反対する
- (d) 道徳的デモクラシー（博愛主義）
- (e) 文学的デモクラシー（白話文）

このとき、陳独秀はデモクラシーこそが五四の時代精神であり、一切の新しいイデオロギー（社会主義をふくむ）を包含する総思想であると説いている¹⁸⁾。以上の全般
的な見取図のなかの白話文や国語の問題は、もっぱら胡
適の分担であつたらしく、彼はそのころ前後数年間にわ
たって、これに関する諸問題について活発に発言してい
る¹⁹⁾。

中国今後之文字問題 『新青年』四卷四号

一九一八年四月（通信）

論句読符号 答慕楼 「新青年」五卷三号

一九一八年九月（通信）

討論注音字母及世界語問題之通信 胡適・朱我農

『新青年』五卷四号 一九一八年十月

請頒行標点符号議案（修正案） 一九一九年十月

『胡適文存』一集および建設理論集

「的」字的用法 『晨報副刊』

一九一九年十一月十一日

再論「的」字的用法 『晨報副刊』

一九一九年十一月二十五日

三論「的」字的用法 『晨報副刊』

一九一九年十一月二十六日

国語的進化 『新青年』七卷三号 一九二〇年二月

国語講習所同学録序（のち「国語標準与国語」と改

題） 一九二〇年五月 『新教育』三卷一号

一九二二年二月

白話文法 『時事新報・学燈副刊』

一九二〇年八月十一、十二、十四日

中学国文的教授 『新青年』八卷一号

一九二〇年九月

国語文法的研究法 『新青年』九卷三、四号

一九二一年七月、九月（のち『文存』一集では第

一篇「導言」を分けて「国語与国語文法」、「国

語的進化」とし、「文法研究法」上、中、下を合

わせて一篇とした）

漢字改造論（其一） 錢玄同・黎錦熙・胡適

『教育雜誌』十三卷十一号 一九二一年十一月

国語運動的歴史 『教育雜誌』十三卷十一号

一九二一年十一月

国語運動与文学 在国語講習所同楽会上講 郭後覚

記 一九二二年十二月

「除非」的用法 『晨報副刊』一九二二年九月一日

請教育部把一切公文改成国語 『努力周報』二二期

一九二二年九月（文存2）

除非 『努力週報』二四期 一九二二年十月

（文存3）

『国語月刊 漢字改革号』卷頭言 一九二三年一月

国語文法概論 『胡適文存』三集 一九三〇年九月

これらの文章のうち、注目すべきもの二点について述べる。

その第一は、一九一九年の標点符号提案書である。

『文存』にも入っているし、『建設理論集』にも「胡適等」として入っているが、提案は六名の連名でなされている。彼が最終的な修正を行ったことが付記されているから、彼はいわばその代表者なのであろう。これは民国八年（1919）に教育部から公布された「新式評点符号案」のもとになった。雑誌『新青年』はそれまで数年にわたって標点符号の実験を行ってきた。それにもとづく最終案であったから、『新青年』グループ全体の貢献と言わね

ばならない。

その第二は、一九二一年の「国語講習所同学録序」で、これは二千字たらずの短い文章であるが、共通語の推移をながめる上で見逃せないことを彼は発言している。

民国十一年（1922）以後、国民学校は一律に国語を取り入れることになり、民国十四年は高等小学の教科書も国語に改められた。胡適によれば、この措置は数十年来の大事業であって、その影響と結果は現在のところ計りがたいが、中国教育の革新を少なくとも二十年早めることになろうという。

この改革にたいして、教育部はまず国語の標準と進行の手続きを定め、しかるのち漸進的に実施すべきだとする反対論があらわれた。この種の反対論にたいし、胡適は言う。「国語の標準は教育部が定めうるものではないし、国語教育の研究団体が決めうるものでもない、また短時日に決めうるものでもない」、「およそ国語の発生には、まず比較的ひろい範囲に通用し、多くの文学を生

み、国語の中核として採用できる方言がなければならぬ。この中堅分子たる方言がしだいに普及し、各地の方言の成分を吸収しながら地方のことばに影響をあたえて行く。これが国語の成立であるとして、以下のごとく続ける。

私たちがいま提唱している国語には中堅分子が存在している。その中堅分子とは東三省から四川・雲南・貴州にかけて、また長城から長江へかけて、もっともよく通用している、大同小異の「普通話」⁽²⁰⁾である。この普通話は七、八百年このかたすでに価値ある文学を生み、水滸伝・西遊記から老残遊記にいたる通俗文学の利器になっている。その勢力は、小説と戯曲の力をかり、それに官界・商場の必要を加えて、早くからすでに国語区域外の多くの地方に浸透している。(私の国語の大半は上海の学校で学んだものであり、小部分は白話小説に教えられ、ごく小部分

は上海の劇場で耳からおぼえたものである。)

いまやこの種のすでにひろく通用し、そのうえ文学を生んでいる普通話を国語と認めて普及させ、これを全国の学校の教科書用語年、またこれを全国の新聞雑誌の文字とし、現代ならびに将来の文学用語とする。これが国語をつくりあげる唯一の方法である。私は忠告する。心配しなくてよろしい。官話を学ぼうと思うなら、「藍青官話」⁽²¹⁾になるのを恐れてはならない。藍青官話を経過せずに、どうして純粹の官話が話せようか。国語を使おうと思うなら、南北の語調の入りまざった国語を恐れてはならない。南北の語調の入りまざった国語を経過せずに、どうして中華民国の真正の国語がもてようか。

「普通話」という用語は、はじめ従来の「官話」のかわりに用いられるようになったもので、たとえば蘇州語のローマ字表記を考案した朱文熊が『江蘇字母』

(一九〇六)のなかで、「この文字は中国文字の改革にして、まずこれを江蘇省に試みるものなり」(付論)しかし「普通話(各省通行之話)をも綴りうる」(自序)と述べているのがそれである。林焘⁽²²⁾は、この語が日本語の「普通」にもとづき、晩清以後に生まれたものと断定している。錢玄同は『文字学音篇』⁽²³⁾で、この用語に関連して、以下のように解説している。

六百年来の「普通口音」は『中原音韻』、『洪武正韻』などの韻書の音である。そのわけは、南北混一、交通頻繁となり、四方の人が一堂に集まり、たがいに談話するばあい、各々その方音の通用しないものをすて、たがいに分かる普通音を用いることを期したからである。これにより一種の「普通語言」(共通のことば)が生まれた。「官話」と俗称するものがそれである。官話という名称はあまり典雅でない。また北京語ともいうが、実情にそぐわない。

実情はこの言語が六百年このかた成文化されない国語であった。

以上の胡適・錢玄同の説はともに同一の言語状況を指しているのだろう。それは「藍青官話」はまた「藍青普通話」ともいわれ、西洋人が blue green mandarin と呼んだごとく、北京語からみれば純粹性を欠くが、一種の共通的な補助言語として全国的にかなり広範囲に通用しており、将来の「国語」の母体として期待できるといふ言語的認識は、このころから少なからぬ人々によって自覚的にとらえられていたようである。

一例をあげれば、日本の中国語学習者を対象とする、李俊漳『藍青官話読本』(全三冊)というテキストが大正九年(1920)に東京文求堂から刊行されている。この本は、第三卷に編者の執筆と思われる「白話文的勝利」をはじめ、胡適の「国語的進化」(一節)や魯迅訳の「一個青年的夢」(一部)などを収録しており、北京官

話一辺倒の当時においては、いぶん斬新な内容である。まえがきによれば、編者はそのような期待をいだいて「国語」を研究している人のようであり、また、藍青の二字を冠した理由に触れて、以下のように述べている。

本書に用いた言葉には北京官話の範囲からはみ出るものが多い。……それは、今や国語を追求する人がふえて、北京官話固有の色彩がしだいに変わったからである。「……的神色很自然」は純粹の北京語なら、「……的樣子很穩」と言うし、また北京語では疑問文の「有没有……？」はきわめて少なく、きつと「有……没有？」と言うだろう。北京語の範囲からはみ出ているとは、この類のことをさす。

「国語」、「国語統一」という用語は清末から使われはじめている。それは日本のコクゴに由来している。日本の国ことばがコクゴとして確立するのは、日本が中央

集権の統一国家として発足した明治期のことである。明治政府は国家権力を背景に、教育政策を通じて、これを広めた。清朝の支配層もまた国家統一のための国語という含蓄をもって、これを受けとめた。したがって、ある地方のことばを基礎にして確立しようとする方向、つまり規範性に傾斜し、多くの人のことばを基礎にする方向、つまり共通性へは向かわなかった。この傾向は中華民国になってからの国語運動も同じであった。だから、共通性へ傾斜する上記の胡適のような議論はその後にも国語運動の側からは聞かれない。

のち、胡適主義の打倒を鋭く激しくとなえ、新しい文学革命のための言語改革を主張した瞿秋白は、官僚的な国語を否定して、「無産階級は五方雑処の大都市や工場において、日々普通話をつくりつつある。これは必然的に各地方の土語の相互譲歩であり、いわゆる官話の軟化である。言語統一の任務もまた無産階級の肩にかかっている」として現代中国の普通話形成をめざしている（普

洛大衆文芸的現實問題⁽²⁴⁾ 一九三二年)。

両者はまったく対極的な立場にあるかにみえるが、どちらも「非驢非馬」の藍青官話を基礎方言とする限りでは変わりはない。さらに、どのようにしてより高度なものへ移って行くかについて、この時期はまだそれに言及できる段階に達していなかったと、見るべきであろう。

四 胡適と梁啓超

清末に梁啓超は「小説界革命」をとまえ、小説の改革を企図した。彼が伝統を拒否し、新しい小説理念をもちこみ、俗語すなわち口語体の使用を主張したのは、中国文学の歴史にエポックを画したといわれている。彼の『新小説』発刊を契機に、清末小説は量的に盛況をみるにいたった。だが、白話文学はやはり「文学の正宗」となるにはいたらなかった。梁啓超はみずから白話体で小説を書いたり、訳したりしているが、ヴェルヌの『十五少年漂流記』を訳した『十五豪傑』第四回のあとがきに

次のように記している⁽²⁵⁾。

本書はもと水滸伝紅樓夢などの書の体裁により、俗話を純用せんとせり。しかし翻訳にさいし甚だ困難たりき。文言をませ用いれば、労半にして功は倍す。計るに、前数回の文体は毎時わずかに千字を訳するのみ。今次はすなわち二千五百字を訳す。訳者は時日をおしめ、やむなく文俗並用す。体例符合せざるを明らかに知る。全書全了の時をまち、再び改定せんのみ。これにより、言と文の分離は中国文学の最も不便なる一端にして、文界革命の易きにあらざるをみるべし。

ただし、これは著名な翻訳家・森田思軒訳の『十五少年』⁽²⁶⁾ (1896) からの重訳である。たとえば、冒頭の部分を引くと、

M 一千八百六十三年三月九日の夜、彌天の黒雲は低くたれて海を圧し、闇闇濛濛咫尺を辨ずべからざるうちにありて、断帆怒濤をかすめつつ東方に飛奔し去る一隻の小船有り。時々閃然として横過する電光のために其の形を照らし出ださる。船は容積百噸に満たざる、ヨットの一種にして、英国及び米国にて、スクーナーと称する両檣的なり。船は名をスロウ号と呼ぶも、曾って其の名を記したる船尾の横板は、物に触れてか、浪に洗はれてか、とく剥落し去りて、復たその名を尋ねむに由なし。

L 話説距今四十二年前正是西曆一千八百六十年三月初九日。那晚上滿天黒雲低飛壓海濛濛闇闇。咫尺不相見。忽然有一隻小船。好像飛一般奔向東南去。僅在那電光一閃中瞥見這船的形兒。這船容積不滿百噸。船名叫做胥羅。曾有橫板在船尾寫著的。但現在已經剥落去。連名也尋不著了。

M 夜はすでに十一時を過ぎぬ。此の緯度にありて此

のころは、夜甚だ長からざれば、五時に向ふころはひには、早やうす白き暁の色を見ることを得べし。然れども天明けなば、スロウ号は能く現時の危難を免かるべき歟。風濤は能く静止すべき歟。

L 那船所在的地方。夜是很短的。不到五點。天便亮了。但雖係天亮。又怎麼呢。風是越發緊的。浪是越發大的。

M 船の上には三個の少年、一個は十五歳、他の二個は各十二歳なるが、十三歳なる黒人の子と共に各必死の力をあわせて舵輪に取りつきをり。

忽然たるすさまじき響きとともに、一堆の狂濤、来りて船を撃つと見えしが、舵輪は四少年が必死の力をあわせて取りつきたるにも拘はらず、忽焉逆転して、四少年を数歩の外に擲ちたり。

L 那船面上就只有三個小孩子。一個十五歳。那兩個都是同庚的十四歳。還有一個黒人小孩子。十三歳。這幾個人正在拚命似的把著那舵輪。忽然砰訇一聲響

起来。只見一堆狂濤。好像座大山一般。打將過來。那舵輪把持不住。陡地扭轉。四個孩子都擲向數步以外了。

M 一個「武安^{フリアン}、船には異常なきや」。武安^{フリアン}はしづかに身を起こして、再び舵輪に手をかけながら「然り、吳敦^{ゴルドン}」と答へて、更に第三個に向ひて「しかと手をかけよ、杜番^{ドバン}、沮喪するなかれ、余らは余らの一身の外に、更らに思はざるべからざる者あるを、忘るべからず」また黒人の子を顧みて「莫科^{モコ}、汝は怪我せざりしか」黒人の子「否な、主公武安^{フリアン}」。

L 内中一個連忙開口問道。武安。這船不要緊麼。武安慢慢的翻起身回答道。不要緊哩。俄敦連忙又向那一個說杜番呵。我們不要灰心哇。我們須知到這身子以外還有比身子更重大的哩。隨後又看那黑孩子一眼。問道。莫科呀。你不悔恨跟錯我們來麼。黑孩子回答道。不。主公武安。

俗語体とはいえ、文俗混用のかなり堅い訳文である。

周作人は、評していわく、²⁷⁾ 梁啓超のこの翻訳は嚴復の『天演論』、林琴南の『茶花女遺事』とともに当時の代表的な翻訳文体とされているが、実は訳者は苦心慘愴、その文体は前後一貫せず、きわめて粗笨な姿のままに残されている、と。

参考までに、胡適の訳文「最後一課²⁸⁾」とくらべてみよう。アルフォンス・ドーデ (Alphonse Daudet) 原作のこの短編は、ずいぶん長期にわたって中国の中学国語教科書にのっていたので、よく知られている。Hは胡適訳、Sは「世界短編名作選²⁹⁾」から拝借した。

H 這一天早晨，我上學去，時候已很遲了，心中很怕先生要罵。況且昨天漢麥先生說過，今天他要考動靜詞文法，我却一個字都不記得了。我想到這裏，格外害怕，心想還是逃學去玩一天罷。你看天氣如此清明溫暖。那邊竹籬上，兩個小鳥兒唱得怪好聽。

野外出裏，普魯士的兵士正在早演。我看了幾乎把動靜詞的语法都丟在腦後了。幸虧我膽子還小，不敢真個逃學，趕緊跑上學去。

S その朝は学校へ出かけるのがすごく遅れたし、アメル先生が分詞法について質問すると言われたのに僕はまるっきり覚えていなかったので叱れるのが恐くてたまらなかった。学校をさぼって野っ原へ駆け出そうかという考えが頭をかすめた。お天気はともよくてぼかぼかしていた。森のふちでツムギが鳴いているし、リペールの牧場の、製材所の裏手ではプロシヤ兵が教練を受けているのが聞こえる。どれもこれも僕には分詞法の規則よりずっと魅力があった。けれどやっと誘惑に勝って、大急ぎで学校へ向かって駆け出した。

学校につくと、妙に静まりかえっている。教室には級友がみな着席しており、後ろの空いた腰掛けに、オゼール爺さん、前の村長さん、郵便配達だったお

じさん、そのほか大勢の人たちが悲しそうな顔をしていた。おや、なぜだろう。ふだんと違って、立派なフロックコートを着こんだ先生はやさしい重々しい声でおっしゃった。

H 我的孩子們，這是我最末了的一課書了。昨天柏林（普国京城）有令下來說、阿色司和娜戀兩省，現在既已割歸普國從此以後這兩省的學堂只可教授德國文字，不許再教法文了。你們的德文先生明天就到，今天是你們最末了一天的法文功課了。我聽了先生這幾句話，就像受了雷打一般。我這時纔明白，剛纔市政廳牆上的告示，原來是這麼一回事。這就是我最末了一天的法文功課了。

S 「みんな、これが私のする最後の授業だ、これからはアルザスとロレーヌの学校ではドイツ語しか教えてはいかんといい命令がベルリンから来てね……新しい先生は明日みえる。だから今日は君たちにとって最後のフランス語の授業になるわけだ、よく注意

して聞いてほしいね」この言葉で僕はすっかり気が転倒した。ああ！何て奴らだ、役場に掲示してあったのはこれだったんだ！これが最後のフランス語の授業だって？

胡適の文章の特徴は平明さである。年小者むけ読み物の書き手としては、そのころの学者文人のなかでは抜群である。だが、その「やさしさ・わかりやすさ」のゆえに、これを平俗として退ける人も少なくない。

彼が「最後の授業」を訳したのは民国元年（1912）在米中のことと、付記されている。まだ文学革命の発想にはいたっていない。梁啓超が「十五豪傑」を訳したのは光緒二十八年（1902）で、両者の間には十年のへだたりがある。それを考慮に入れても、二人の書いた白話文には質的にかんりの違いが感じられる。胡適にとって、それは幼少から親しんできたもの、梁啓超にとっては努力目標であった。

梁の「あとがき」は皮肉なことに、彼ほどの文筆の雄をもってしても、不慣れな白話文を書くのは容易なことではなかったことを物語っている。周作人は、古文を書くのは難しく、白話を書くのはやさしいと誤解されているが、私の経験では古文を書くのは白話を書くよりずっとやさしい、白話を書くのは好んで苦勞を求めるといふものだと知っている（中国新文学的源流）。梁のあとがきは、その説を裏書するものと言えよう。

ちなみに、広東出身の梁啓超は北方の官話にも不慣れのようなだった。こんな話がつたえられている。一八九八年、彼は光緒帝に謁見をたまわった。彼のような年少気鋭の士を京師に招きよせ維新の事業に当たらせるためであった。七月三日、彼は参内した。時に十七歳である。すでに挙人の試験に及第している。当時のしきたりでは挙人の資格をもつ者が皇帝の召見をうければ、翰林いりの賞賜をうけ、内閣中書ぐらいに列せられ、四品はいたただけるのに、彼は六品を授けられ、訳書局の事務をおお

せつかるにすぎなかった。文名の高い彼にしては冷遇である。のち王照が知人あての書翰で漏らしたところによると、梁は広東出身で方音が強く、「孝」を「好」、「高」を「古」と発音する。意志の疎通をかき、この点で光緒帝の不興をかい、重用されなかったらしい。梁はこれにかんがみ、のち李惠仙夫人から官話をならうことになった³⁰、という。

一九五〇年代にまきおこった反右派闘争のなかで、胡適は激しい批判・闘争的になり、その後も彼のかつての学問的業績はほとんど否定もしくは無視されがちであった。最近にいたってようやく彼の業績の全面的な見直しが行われるようになっていっている。

胡適にたいする、最近の評価の一つ、朱文華『胡適評伝』は以下のごとく述べる。

胡適の白話文提唱の意義は、その主観的願望ならび

に客観的な社会への影響からみて、ただ文言を白話文にかえたことだけに局限されないし、またたんに文学革命を引き起こしただけにとどまらない。根本的な点は、それは辛亥革命後の中国社会および思想文化の大変動に順応しつつ、新しい歴史的條件のもとで、中西文化激突のもっとも厳しい時に、タイムングよく適切に思想革新と思想解放の突破口をえらびとり、そのことによって、近代中国における戊戌維新につぐ、かつそれより深刻な思想解放運動をもたらしただけである。それはまた、まさに来らんとしていた社会革命のために欠くべからざる世論を準備したのである。これらすべては、胡適以前の人のなしえなかった貢献である。

胡適という人は、竹内好のことばを借りると、思想的には深みをもっていない。幅はひろいが、奥行きはあさい、この点ひと時代まえの梁啓超に似ていると言う（胡

適とデューイ)。文体の改革や「文界改革」に手をつけ、若年にしてスターの座につくなど、たしかにこの二人には類似点が少なくない。だが、胡適が登場するころには、科挙の廃止・清朝の崩壊、中華民国の成立など政治制度の激変により、世の中はすっかり変わっていた。古文の権威をささえる基盤がぐらついていたし、嚴復や林紓らの古文訳の限界もしだいに明らかになってきていた。さらには「最大多数の人」のことを考える人々により語文改革がいろいろと試みられていた。胡適は梁啓超とちがって、清朝以来の国語運動・語文改革をも射程内におさめることにより、砲撃の効果をいちじるしく高めることができた。これらの点を考えあわせると、五四の変革期において胡適は、戊戌維新のさいの梁啓超以上の役割を果たしたことは明らかであろう。

注

- (1) 『青木正児全集』第二卷(春秋社、一九七〇年)の「支那文芸論叢」に収める
- (2) 文学改良芻議 また『胡適文存』一集卷一および『中国新文学大系』第一集 建設理論集に収める
- (3) 歴史的文学観念論 また『胡適文存』一集卷一および『中国新文学大系』第一集 建設理論集に収める
- (4) 建設的文学革命論 また『胡適文存』一集卷一および『中国新文学大系』建設理論集に収める
- (5) 胡適述 原三七訳 「文芸の再生」(陳衡編 石田幹之助監訳 『支那文化論叢』 生活社 昭和一七年)
- (6) 『中国新文学大系』建設理論集 導言 一九三五年
- (7) 吉川幸次郎訳 『胡適自伝』 養徳社 昭和二十一年 再版(初版は昭和十四年)のち「四十自述」と改題して『吉川幸次郎全集』第十六巻に収める
- (8) 『嘗試集』 亜東図書館 一九二〇年三月初版 九月再版 二二年増訂四版
- (9) 『藏暉室劄記』 亜東図書館 一九三九年初版 四七年十一月、商務印書館再版(のち『胡適留学日記』と改題)
- (10) 逼上梁山 文学革命的開始 『東方雜誌』第三十一卷第

一期 三十周年紀年号(一九三四年一月)、また『中国新文学大系』 建設理論集に収める

(11) 樽本照男 『清末小説閑談』 法律文化社 一九八三年

(12) 朱文華 「胡適評伝」 重慶出版社 一九八八年

(13) 周作人 『中国新文学的源流』 北平 人文書店

一九三四年

(14) 五十年來之中国文学 もと一九二三年二月『申報』五十年

周年記念刊の『最近之五十年』に掲載 のち一九二四年三月

月 申報館より単刊 『胡適文存』二集巻二に収める

(15) 黎錦熙 『国語運動史綱』 商務印書館 一九二三年 初

版 二四年 再版

(16) 「新思潮的意義」また『胡適文存』一集巻四に収める

胡適はこの論文で、旧有の学術思想にたいして、批判的、科学的精神をもって「国故整理」をすべきことを主張し、

のちの「問題と主義」の論争がこの背後に秘められ、彼はその後、主として中国の伝統哲学や文学についての批判・整理へ転進し、その後はアカデミックな世界へ志向されていった。

(17) 朱德発 『五四文学初探』 山東人民出版社 一九八二年

年

(18) 陳独秀は、前記の胡適論文がのった同じ号(七巻一号)

に、「民治実行の基礎」と題する論文をのせている。そこには、デューイの思想の圧倒的な影響がみられる。野村浩一氏のことばを借りれば、「少なくともここには、デューイの紹介した「アメリカの民治主義」のポイントが、ある鮮やかな感触をもって陳独秀に受けとめられていたといつて決して過言ではあるまい。」(『近代中国の思想世界』

岩波書店 一九九〇年)

(19) 主として下記による。華東師範大学図書館編 『胡適著訳系年目録与分類索引』 上海人民出版社 一九八一年

(20) この時期の普通話はいわゆる「藍青官話」をさしており、また「南腔北調的普通話」(南北各地の発音の入り混ざった普通話)などともいわれ、現在とは違った意味で使われている。現在の「普通話」に関する公的な見解は以下のとおりである。

中国語の統一の基礎はすでに存在している。それは北京語音を標準音とし、北方語を基礎方言として典範的な現代白話文を語法規範とする普通話である。(一九五六年二月、共通語の普及に関する國務院の指示)

(21) 「藍青官話」について、ある書物では次のように注釈を加えている。「他の地方の発音の混ざっている北京語の旧称」(『瞿秋白文集』第三巻 二三八頁)

- (22) 林焘 『関于漢語規範化問題』 北京大学中国語言文学系語源学漢語教研室 文字改革出版社 一九五七年
- (23) 曹述敬編 『錢玄同音学論著選輯』 山西人民出版社 一九八八年
- (24) 『瞿秋白文集』第一卷 人民文学出版社 一九八五年
- (25) 『飲冰室專集』卷之九十四による
- (26) ベルヌ著 森田思軒訳 『十五少年』博文館 明治二十九年十二月
- (27) 周作人 『談虎集』 北新書局 一九二九年
- (28) 「最後一課」(訳者自序『短篇小説』第一集 亜東図書館 一九一九年六月)
- (29) 「最後の授業」ドーデ 佐藤実枝訳 (蔵原惟人監修 『世界短編名作選 フランス編』 日本出版社 一九七七年)
- (30) 唯唐 「梁啓超与普通話」 『文字改革』 一九八四年第四期